<table>
<thead>
<tr>
<th>タイトル</th>
<th>高山寺における聖教目録の変遷 (二) 補遺</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>著者</td>
<td>徳永 良次 (TOKUNAGA, Yoshitsugu)</td>
</tr>
<tr>
<td>引用</td>
<td>北海学園大学人文論集 2015-08-31 第五卷</td>
</tr>
<tr>
<td>発行日</td>
<td>2015-08-31</td>
</tr>
</tbody>
</table>
高山寺における聖教目録の変遷（二）

はじめに

本稿は、前稿の続きとして、前に言及出来なかった課題、また、その後得られた新知見を加えて、高山寺における聖教目録を探求する。

まず、鎌倉時代の明応上人による創建以来、寺内において聖教目録がどのように重ねられたのかについて検討する。

つまり、前稿で検討した内部観想による高山寺聖教目録をその目録の変遷は逆、聖教目録自体に記載されてきた「目録」の様相と変遷を辿っていく。次に、現存する目標には記載されていない寺宝の経過について考察しておく。

例えば、「鳥獣人物絵画」、「華厳宗祖師絵伝」を主要な寺宝として検討し、必要に応じて他の絵画・仏像等についても言及する。これを辿ることで、高山寺資料とそれを記載した聖教目録の変遷について検討可能かどうか考えた。

同時に、これら目録類にとどまらないう年率等について考察する。

高山寺の聖教の重要性は、国語史研究上、極めて価値が高い資料が大量に、かつ、まとまって現存していること。
（男）

『粂 phosphorphenylphosphine』（男）に「粂 phosphorphenylphosphine」を挟む方法について

（2）

（男）

（綜合）

（男）
鎌倉時代建長年間

この時期に高山寺の聖教に対する目録の大規模な整備

鎌倉時代建長年間

鎌倉時代建長年間

明恵上人存命当時の大喜年に止まっていたが、この

以降建長年間までの成立であり、当時行われていた高山

寺聖教とその目録整備の過程で作成された資料と見られ

る。現存する『真上房書籍欠目録』を見る限り、聖教目録

の記事は見られない。

3『高山寺聖教目録』（建長二年）

鎌倉時代の大規模な目録作成活動は、先にみた『聖教

目録物語』の第二次の作成と時期を同じくする建長二年

から三年にかけて行われたと考えられている。本目録も

これと同時期、すなわち建長二年に義淵房霊典が後嵯峨

院の命により、撰進されたものと考えられる。ただし、

この建長二年撰進という事を示す確実な資料は、全く見

いただすことが出来ていない。わずかな江戸時代末期の高

山寺僧慧友と推定される後補包紙への書き入れが知られ

るのみである。

この聖教目録は、次の『高山寺経蔵聖教真言書目録』

と一具として作成された目録で、高山寺経蔵に所蔵され

るのみである。
北海学園大学人文論集 第59号（2015年8月）

建長三年辛酉四月六日校刊之了　長真記之

先述した通り、本資料は寺内経蔵の真言書に関する所蔵目録であり、『高山寺聖教目録』は真言書以外の書籍目録という関係となっている。そこで言う『真言書』は東経蔵に収蔵されたものとする先行研究もあり検討を要する。本資料に見られる聖教目録の記載は、以下の通りである。

真第十一
小野抄目六一
巻末奥書
灌頂道具一合目録道具欄納之在東経蔵
別筆

目録内に記載された『小野抄目六一』は真言宗小野流の一ずれかの書籍目録であると考えられ、高山寺の聖教目録とは直接的な関係はないであろう。しかし『真第十五』に記載されている『根本大和尚真跡策子目録』は、弘法大師空海が中国から請来した三十帖策子についての目録であり、関連があり、卷末奥書の別筆記事は『高山寺聖教目録』にも同様の記載がある。本資料は、高山寺経蔵に収蔵されており、表紙に『真第十五』の識語があり、これと矛盾しない。これかの時期に所属替えが行われたものであろう。この記載は別筆と推定されているために、後世、建長以降いずれの時期に所属替えが行われたものであるかは未解である。この目録同様、意識的に巻末に特立したものと考えられる。目録注目すべきは『目録道具欄納』という書き入れである。道具についての目録であるのかも知れない。つまり、聖教目録類を『灌頂道具』と『聖教目録』をともに欄に納めたということなのか、現在では不明である。

『灌頂道具』と『聖教目録』とする方が自然とも思われるが断定すべき。
高山寺における聖教目録の変遷（二）（德永）

5 高山寺縁起（建長五年推定）

本資料は、聖教目録に関しての一次資料とは言えないものの、創建時の高山寺の概要を知る上で重要なものである。奥書によれば、神尾山の開祖とされる明恵上人の弟子、順性房信の作成という。その奥書は以下の通りである。／は改行を示す。

（別筆）

1. 天文第五丙申七月十七日以手払之次少く披見之未校本
   2. 依蒙、仰隨勘得粗注進之
   3. 写本云
   4. 弘安九年十月七日書
   5. 神尾山本中野於北尾首尾三日書写比丘尼正念

于時永正十一稔應鐘中九日於西山高山寺東坊方便智院草

庵以善財院御本如形／

写之者也殊更□折番軽賤之間且雖愚案後日可加清書之間

永禄五年十二以私本之古本校合了

権少僧都寛怡（花押）

求道貧愚弁朝廿五年

（八）
以下、本稿に関連する記事を列記する。

【九】

一、経蔵二字
　東経蔵

本は羅漢堂東辺立之而羅漢堂造立之刻於石水院西岸移
造之且怖火難遠煙也

合大小乗経律論及賢聖集等

又本四十四卷見在五千三百七卷信行禪師三階仏教等已

四十四卷火而相当上人十三年之忌辰続彼本滿一部畢

合五百三五十一巻内

懐一千二百三十八部

【十】

西経蔵
　奉納一切経責

此外東觀天台法相等章疏井真言書籍仏像等納之

【九】

室町時代文明末頃（十五世紀末）

『方便智院聖教目録』（旧目録）
（第四部、一九九巻、第二部）

『方便智院聖教目録』

室町時代文明末頃（十五世紀末）

同七七巻80、第一部202212

方便智院

『方便智院聖教目録』

方知院内 dentist房屋定在第一世とする由緒ある僧坊であ
り、当初から経蔵があったとする説もある。方便智院の
成立時期については、宝治元年（二四七）の仁真書写
高山寺における聖教目録の変遷（二）（德永）

本の巻書に見えることが指摘されている。

その巻書に、現在知られている「方言智院聖教目録」の経典と、現在知られている「方言智院聖教目録」の経典を参考に、『六時相生』にみられる「新目録」の成立時期についても定説を見ない。現存する目録は、海湾の三冊に至ったかを解明することは困難である。他は、江戸時代に通称「新目録」と呼ばれる「方言智院聖教目録」に至ったかを解明することができないことから、『方言智院聖教目録』は現在のところ確認されていない。従って、本資料には次のようない、高山寺聖教に関する目録を意識的に収録したとみられる記事がある。以下、関連する部分を記載順に抜書する。当該資料の目録上の分類標目を「」に、位置は冊・頁付ける。6才は記載位置である。
高山寺における聖教目録の変遷（二）（德永）

すなわち、現存する方

ただし、記載されている聖教目録を見ると大部分で重複

26巻「第四十七表」（旧目録）の姿なのである。

「第四十六表」（二三20）にある「目六小箱」の記事は、本稿を考える上で注目されるが、原紙の下半分を欠いており、具体的にどの「目録」を示すのか、内実は不明である。

・便益院聖教目録

結局、当初「第九表」に一括して記載された聖教目録は、後に「第四十七表」（旧目録）を変更したものである。本来は26巻が最初であったが、23巻に続いていたのである。

つまり、一度は一冊目に一括して記載されていた聖教目録が、何らかの理由で新たに第二冊目に記載位置が変更されたのである。二冊目の記載順が逆になっているのも、配列は完全に一致する。

もし、一部巻に記載面が大きく×印が付されている。聖教目録の記載順も、一冊目を基準に見ると、二冊目

丁表裏面ともに墨書にて大きくX印が付されている。

本資料には高山寺所蔵にかかる聖教目録が、まとまっ

た形で三冊所記載されている。その記載位置は、二冊目

の13丁表「第九表」と、二冊目23巻「第四十七表」と同

三十四

真言目録

御作目録

新撰来目録一

第一七表「善知識讖略」

「第四十四表」（二三20）に一括して記載された聖教目録だけが26巻が最初で、続いて23巻に続いていたのである。

すなわち、現存する方
すべきである。江戸時代

江戸時代初期の寛永十年前後に、仁和寺の覚深法親王の命により、高山寺の復興が行われた。この時に徳川茂家が
大規模なインスペクションが実施され、聖教類整備により
新たに作成された目録がある。奥書はないもの
を新しい聖教録の一つであることを同時に制作
と見て間違いはない。これでは、古録の七余合（箱）について、現在見える分

（九）

レは、古録の七余合（箱）について、現在見える分

（第一页）

「方便院聖教録」の「第四号録」に集められた、録倉時代以降
現場に伝来した聖教録を「古録」。とし、新たに編
流の二合と諸録の「一合を付した」とされている。さら
に補足するならば、諸録の「一合を付した」、とされている。さら
易が、現在の高山寺に伝来した聖教録を「古録」。とし、新たに編
っては古録、新録が「一合を付した」、とされている。さら

（九）

方間院聖教類録（新録）

方館院聖教録（新録）

方館院聖教類録（新録）
高山寺における聖教目録の変遷（二）（德永）

『東第十六』

（第二十一紙）（原第二十四紙）

上人製作目録井花厳宗血脈

卷切紙

『東第十七』

（第二十二紙）（原第二十九紙）

已上方便智院廿合目六畢（朱書）

『第二十三紙』（原第二十紙）

儀軌本経私記等目録一卷

『第二十四紙』（原第二十六紙）

儀軌目録一卷

『第二十五紙』（原第二十五紙）

諸尊法目録一卷

（第二十八紙）（原第二十紙）

尊法目録一帖

野月私抄目六一紙

『第二十一紙』（原第三十一紙）

厕所抄目六一卷切紙

御申

（第二十二紙）（原第三十二紙）

深秘抄目六一卷切紙

刑部入道進西経蔵（朱書）

已上方便智院廿合目六畢（朱書）

（第二十七紙）（原第二十九紙）

髄尊法目録一卷

法華臺聖教目録上中下（朱書）

（第二十八紙）（原第二十紙）

尊法目録一帖

野月私抄目六一紙

（第二十四紙）（原第二十六紙）

儀軌目録一卷

（第二十五紙）（原第二十五紙）

諸尊法目録一卷

（第二十八紙）（原第二十紙）

尊法目録一帖

野月私抄目六一紙

（東第十六）

（第二十一紙）（原第二十四紙）

上人製作目録井花厳宗血脈

卷切紙

（東第十七）

（第二十二紙）（原第二十九紙）

已上方便智院廿合目六畢（朱書）

（第二十八紙）（原第二十紙）

尊法目録一帖

野月私抄目六一紙

（第二十紙）（原第三十一紙）

厕所抄目六一卷切紙

（第二十一紙）（原第三十二紙）

深秘抄目六一卷切紙

刑部入道進西経蔵（朱書）

已上方便智院廿合目六畢（朱書）

（第二十七紙）（原第二十九紙）

髄尊法目録一卷

法華臺聖教目録上中下（朱書）

（第二十八紙）（原第二十紙）

尊法目録一帖

野月私抄目六一紙

（九三）

高山寺印一枚
高山寺における聖教目録の変遷（二）（德永）

同じく「顕絃蔵」には、総査の中から「両界万方」という名も入ったものが収録されていた。この際、この他に同様のものを取り出した。だが、このされた絵画は保存されているものである。①に関しては、その後どのような処置を行ったのか不明である。②に記載されているのである。建長年間の「高山寺聖教目録」の末尾の「一八一乙」箱内にあることも示すものとも見られるが、後世の作品も含まれており、これまた重要な資料と言える。表紙には、「明治十八年七月二日改新写京府井法務所」という書込があり、これに依頼して書き入れられた。資料の随所に、検印とおりし、「第三項」などの書き入れから、実際の高山寺蔵書等が点検されたものであることがわかる。従って、下書き・点検用の性格を有するものであろう。全体の構成は、

【前記】

近代

9 宝物寄附物古文書什物取調牒

本資料は現在知られている限り二点が存在している。

まず、記載年代の順に第一次版、第二次版とする。再版に、作成時期はを考慮に

【注】

資料には記載がなく仮称

【法華聖教】（注）

全体の構成は、

【法華聖教】（注）

資料には記載がなく仮称
高山寺における聖教目録の変遷（二）（德永）

第一次版

一
一
一
一
一
一
一
一
一
一
一
一
一
一
一
一
一
一

第二次版

一
一
一
一
一
一
一
一
一
一
一
一
一
一
一
一
一
一

—82—
北海学園大学人文論集 第59号(2015年8月)

一木抄本
入目六

【三号】

一

眼箱

以上、両本を併記して見ると、細部に異同が見られる。

ここでは、主として本稿に関する異同のみを挙げたが、実際には両本の間に、多くの異同や修正の跡が見られ、第一次版で点検・修正が施された浄書版という位置づけの第三次版の書き方である。

この九号という版数は、現在高山寺聖教類第巻として登録され、聖教目録が一箱に納められている。193号の九巻と一致する。ここに納められているのは、すべて寛永

【九八】

期の聖教目録であり、実際に利用・管理する目的で、現存聖教とのインスピレーション、目録の作成が行われたものです。

以上、鎌倉時代以降、近代に至るまでの聖教目録・伝記類・文書等から見えた聖教目録の保管と整理の過程を概観してきた。これまでに判明した点をまとめておく。

現在の形になったのは、江戸時代寛永年間「方便智院聖教目録」（新目録）である。

明治期にも目録の構成は変化がないが、その目録と実際の聖教との対応関係失われている。
11 『聖教目録撰集』（寛喜三年・延長三年）
本資料に直接接続し、関係する記述は見られない。しかし、
以下のように、『物』という記事の付された箇所が存在
していたことが知られる。この箇所は、後年作成された宝物
寄附物に古文書什物伝記調査（明治十八年）の宝物部
に記載されている「黒塗梓板」一例のことを示している
かかも知れない。なお、検討を要する問題である。

黒塗梓板
（第十紙）
（合撰：寺利大師御筆等書物）

12 『高山寺聖教目録』（建長三年）
本資料に、次のように記事が巻末に出されている。

義厳若聴絵と能恵得業絵（合撰）
兼康筆絵本一巻
（合撰：能恵得業絵）

前述した通り、『高山寺聖教目録』の一百乙の箇所に書籍
以外の寺宝類と聖教目録を収めた箇所以ある。当時経蔵に
は義厳若聴絵（義厳若聴絵）と能恵得業絵（能恵得業絵）
の記録に入っている。この内、義厳若聴絵は現存しており、後世
の記録にみるには未だ現存であるが、能恵得業絵は関連
の絵本として知られているが、それと同種のものであろう
ものである。
高山寺における聖教目録の変遷（二）（德永）

一禅堂院一字 三間四面

仏堂院の西面持仏堂に華厳宗に関係する仏画が掛かれており、これはその一部である。この「善知識」の仏画を描いたのが兼康であるとするが、両者同ーの「絵本」であるのかは未解である。同時代の絵師として宗内兼康の活動が活躍していたことが知られる。この兼康と時期的には該当するかも知れないが確証はない。後述する「善知識」では、この「兼康筆絵本」が仏堂院に掛けられていた。「善知識」では、寺宝の名称が明確に記載され、それが本目録には、寺宝の名称が明確に記載され、それが

13

『高山寺縁起』（建長五年 推定）

先述したとおり、本資料は高山寺創期の状況を知る貴重なものであり、寺宝に関しても以下のように記載されている。ただし、主要な典籍のみ抜粋する。

同絵像十六羅漢 一部（8枚）

・上人在生之時嘉禄三年四月十日成暹威儀師成俊道真弟子

同絵像廿天一部 信慶施入之

為二親報恩施入之

同絵像廿天一部 信慶施入之

同絵像廿天一部 信慶施入之
後面唐本経像阿弥陀如来一舖同無人

中略

此外華厳天台法相等章疏并著書籍経像等納之目錄別在之

抑壇上所備仏具等本是上人年来所持仏具也而彼仏具上人

昔於紀州白土峯=練行之時於仏眼尊ヲ前斬右耳之刻彼血

散々=点々退行ノ連座ノ身関伽器等是其血朽入=于今不失

遺聴=依重此事納置仏具以別仏具所居改也為決後日

恵日房成忍筆銘即上人自筆也

又傍宋慈心房観覚=民部卿長房卿真影成念

中略

このように、寺内各所に仏像・絵画などがあったこと

という記事は、「高作寺聖教目録」の第一百一二に見える

「義湘院院絵經能恵得業絵等」を示すのであろう。前章

で検討した「目録別在之」の書入れに関連を何させる。

「経像等」波線路=禅堂院の記事には、「仏眼尊」、「上人

経像座禅真影」が見える。これらも高山寺に現存する

寺宝であるが、この時期の聖教目録等に記録は見られな

い。

「鳥貴人物絵画」については、美術史の分野等から多く

特に「鳥貴人物絵画」について
15 東経蔵本尊御道具以下請取注文之事（永正十六年）

鳥獣人物戯画の施入に関する研究では、すでに美術史の立場から多くの論考が公刊されているが、中でも最も先駆的で、かつ、確実な議論を持って言及しているのは、福井利吉郎氏である。さらに、上野憲示氏は、この資料を写真複製を付して紹介されている。以下、複製部分を翻刻して示す。

本資料については、江戸時代寛永年間に作成された目録「東経蔵本尊御道具以下請取目録」に次のよう記載が見られる。

書名はやや異なるものの、江戸時代初期までは本資料も高山寺の目録として認知され、かつ、『古目録』として存在していたことを示している。これは、上野氏が紹介している本資料の記事と矛盾しない。現時点で、この『東経蔵本尊御道具以下請取注文之事』
高山寺における聖教目録の変遷（二）（徳永）

室町時代永正年間に「華厳宗祖師誌経伝」に「鳥獣人物図」が箱端に記せられた、高山寺東経蔵に所蔵されていることが判明する。奥書からは、「これら寺宝が『東経蔵』にあったこと、それを高山寺の僧房の一つである地蔵院弁効が『東経蔵』へ渡したという内容であることが分かれる。

地蔵院は、仁和寺の信経を一世とする比較的新しい塔頭で、弁効はその付法弟子である。記録によれば、「文徳元年（1498）四月二十五日入壇」にかけて活動した僧侶である。「東経蔵」というのは、高山寺の地方陣で、東坊と称される。この地域の地方陣の僧侶は、第九世、明律上人弁効が同時代と見られる。弁効は記録によれば、仁和寺で信経所持の聖教などが合わさってもたらされたと考えるのは不自然ではないだろう。地蔵院は、高山寺の信経は院政期の白河天皇の第二皇子である（覚行法親王）の流れを汲むものとなる。「鳥獣人物図」は、信経弁効が方広院弁効と移して高山寺にもたらされ、信経弁効は方広院弁効と移して、この時期に高山寺『東経蔵』に収蔵されたとされる見方は自然なことであろう。

16「華厳縁起経巻」裏打紙（元亀元年）

本資料は、やはり福井利行郎氏により早くに言及されている著名なものである。この記録から、先の永正十六年から数十年後にも絵巻類は一括して保管されていたことが判明する。以下、福井氏の論文を引用する。

「これは同寺の華厳縁起を明治六年博物局で修繕した時、共の古い裏打紙から見出されたものであった。徳永氏の資料によれば、」

（二〇五）
この記事を残した「羊僧□性」という人物について、
高山寺の記録を検するに、「羊僧」は「昭羊僧」の略称、
□性は、中坊観海院に「真性法印」という僧侶が該当するが決してではない。ただ、中坊観海院は「開田御室御
注目して良い記事を見ると、戦乱により東経蔵にあっ
た絵本類は、バラバラにされ、あるいは焼失して原形を
留めず、かつ、すぐに復元することも難しい状態に置か
れた。そのため、取り敢えず「此坊」に保管しておく。

17「笛入子六合目録」（寛永十年）

江戸時代寛永期に仁和寺覚深法親王の命により大規模
な絵蔵の整備が行われ、合わせて聖教目録も新たに現状
と合わせる形でインスペクションと新規作成が行われた
ことは、前述した通りである。この、巻末部分に絵巻が
記録されていることは、夙に知られてきた。
高山寺における聖教目録の変遷（二）（德永）

筆者も、高山寺において原本調査したことがあり、これを踏まえて以下に紹介する。

義消大師絵図（朱）　（今度調三巻重刊本様）
元暦大師絵図二巻（朱）　（墨書）

絵本一結（朱）

文書類を別途保管して管理するための目録である。六合寺における寺宝類の変遷を聖教目録との関連でまとめ、中世以降、この江戸時代寛永期までの資料から、高山寺における寺宝類の変遷を聖教目録との関連でまとめ、これに寄稿した「鳥獣人物戯画」を参照して記録された。室町時代には高山寺に没入した鳥獣人物戯画が、十六世紀になると「夏」「秋」に見られるようになる。

（絵本・行二対応スス裏書）

朱二件六分可為山中不出也（文書）

加筆時は不明ながら朱筆にて「記念」部分の書きに、その記事を完全に一致する。「記念」とは、この資料をさすと考えてもよいだろう。
四川大学

四川大学(简称川大)是教育部直属的高水平研究型综合大学。它的前身为四川农学院，成立于1927年。学校位于四川省成都市，是中国西部的重要学府之一。

四川大学的前身是成都华西大学，成立于1924年，是中国最早的教会大学之一。华西大学在1941年合并了四川大学，成立了四川大学。1945年，华西大学和四川大学合并，形成了今天的四川大学。

四川大学的学科门类齐全，涵盖了哲学、经济学、法学、教育学、文学、历史学、理学、工学、农学、医学、管理学、艺术学等12大学科门类。学校现有73个本科专业，32个一级学科博士学位授权点，137个一级学科硕士学位授权点，17个专业学位类别，10个博士后科研流动站。

四川大学的师资力量雄厚，现有专任教师3700余人，其中教授1200余人，副教授1100余人。学校有中国科学院院士20人，中国工程院院士21人，长江学者特聘教授120人，长江学者青年学者70人。

四川大学的科学研究成果显著，近年来在人工智能、新材料、生命科学、航空航天等领域的研究取得了一系列重要成果。学校拥有多个国家级重点实验室和国家工程研究中心，以及多个省部级重点实验室和工程技术研究中心。

四川大学的国际合作交流广泛，与世界上多个国家和地区的大学、科研机构建立了合作关系。学校每年接待来自世界各地的留学生和访问学者，开展国际学术交流和合作研究。

四川大学的校园环境优美，校园占地面积2800余亩，建筑面积140万平方米，拥有现代化的教学楼、实验室、图书馆、体育馆、体育场等设施。学校注重学生的全面发展，倡导开展丰富多彩的课外活动，为学生提供了良好的学习和生活环境。

四川大学是一所历史悠久、学科门类齐全、师资力量雄厚、科学研究成果显著的高水平研究型综合大学。它以严谨的学风、卓越的教育质量和优秀的科研成果赢得了社会的广泛赞誉。
近代初の文化財調査。この調査には町田久成、神川式胤、内田正雄ら明治期の文化財行政を担う人々が参加し、伊勢、名古屋、京都の社寺や華族の宝物とともに、奈良で正倉院宝物の調査も行なっている。初めて写真による記録が行なわれ、横山松三郎が撮影を担当した。調査団は七月二十日から二十三日の間に高山寺に滞在し、多くの文化財を調査しているが、その中には「鳥獣人物劇写」に取り、華厳宗宗師絵伝はおよそ十数年後の明治十四年からより修理の必要性が説かれたのだろう。鳥獣人物劇写、および華厳宗宗師絵伝は、これにかかって、博物局によって「修録」が施された。実際に明治十四年に行われた修録の記録は、これらを収めていた旧箱に付されている修理銘であり、それは次のようなものである。
春日神
住吉・春日神像
宅磨勝賀二世筆

Kozanjī
Toha Sojo, Kozanjī Yehon 4
Toha Sojo, Kozanjī Yehon

Kasugamiojin
Nobuzane, Shogun daza no ye
Kaneyasu, Kaneyasu Yehon

Sumiyoshi & Kasuga deities by Takuma Shōga 2nd

春日神像、宅磨勝賀二世筆

物語

このメンバーラーによって行われた近畿物語調査の際に撮
影された記録写真が現存している。

（中略）

宝物

鳥羽僧正筆

覚覚僧正筆

信実朝臣筆

前篇でも取り上げた本資料にも寺宝類は記録されている

（浄書版）のみとする。

このように、明治期の高山寺の記録においても右のニ
点の絵本は宝物として現存していることが知られる。
ただし、この資料（第一次版を含め）を検する限り、フェ
ノロサの記録にあった「兼康絵本」という書名は見当た
らない。
四まとめ

さて、高山寺は鎌倉時代創建期以来、連綿として聖教目録を重要なものとして位置づけていたことが、前号から本稿にかけて様々な観点から検討してきました。ここまでで明らかになった点をまとめておく。

① 高山寺には明末人存命当時の扁鵲年間から聖教目録が作成されており、一般的には三度の大きな編成替えが行われた。

② その体制は、中世末期までには比較的創建当時の姿であったが、中世の混乱期に多大な被害を受け、もとの体制を維持することができる呪物・呪符画に至ったものである。

③ 聖教目録が一括してまとめられ、記録に残されるようになったのは、室町時代文徳年間以降のことである。

④ 江戸時代寬永期に大規模な再建と復興作業を行われ、聖教と聖教目録も当時の現状に従って整備された。

⑤ 近代に至り、高山寺内外の関係者により、寺宝類の記録・修繕が行われ、特に明治十八年には大規模なインスペクションと記録が残された。この記録により、現在の高山寺における聖教目録の保管状況が合計二箱にわたることが判明する。

この期には、寺内の子院も聖教を保有することがあり、しばしば高山寺本体から子院への所属替えも行われ、聖教目録として記録されることがあった。
一 

高山寺経蔵と聖教目録の関係についての言及はすでに多くの論考がある。
すべてをあげることはしないが、主要なものは以下

奥田敏『高山寺経蔵古目録について』宇都宮大学教育学部紀要、第二六号第一部、（九七年）

築島英『高山寺経蔵文書総合調査団、東京大学出版会、（一九七六年）

書総合調査、東京大学出版会、（一九七七年）

さらに、近年、一般向けの図録解説にも次のように紹介されている。

『前文省略』『京師時代の草創期から今に至る期間の約一万二千点の高山寺典籍文書の伝来が、
概略把握可能となっている。これは世界的に見てもかなり希有名なるとと言えよう。高山寺草創期から代々続いていた真摯で合理的な学問の成果であり、学問と文化の面で新たな目録、四

徳永良次『高山寺経蔵聖教目録禅房御帳』に記載されている聖教についての目録等は除外した。

一方『方広院聖教目録』（第一冊60）、あるが、これはただに高山寺聖教と関係の

ある可能性は少ないが、今回は『目録』という書名を有している資料は原則として取り上げることとした。また、欠損等によって目録として目録の書名が欠けている場合においても、明らかに聖教目録である場合は記載し、検討の対象とした。しかし、『諸尊文書、三

編『鎌倉時代語研究、第二十三輯、武蔵野書院、（一九九七年、一月）』

四

宮澤俊雅解説『高山寺経蔵とその古目録について』（東京大学出版会、（一九七八年）』

北海学園大学人文論集 第59号（2015年8月）
高山寺における聖教目録の変遷（二）（德永）

○○二年

德永良次「禅房観覧計次鏡」解題（高山寺典籍文書綜合調査団「続高山寺経蔵古目録」、東京大学出版会、二〇〇二年）

奥田敏「高山寺経蔵古目録」について（高山寺典籍文書綜合調査団「高山寺経蔵古目録」、東京大学出版会、一九九八年）

八

石塚晴通氏による、「唐本切経目録」は、東西経蔵のいずれかの聖教目録と目されている（唐本切経目録解題、高

山寺典籍文書綜合調査団「続高山寺経蔵古目録」、東京大学出版会、一九九八年）

では触れておらず、理行房は後のものとする。

十二

奥田敏氏は、詳しくも宝治元年には名実ともに備わった方丈院が成立していたことが知られる。この方丈院が経蔵を持

ついていたかどうかは確証がない。当初から存在していたと考える方が自然であろう。とし、方丈院の経蔵が鎌倉時代

から存在するとされた。（奥田敏「高山寺経蔵の室町・江戸時代の経籍について」、高山寺典籍文書綜合調査団、東京大学出版会、一九八〇年）

十三

経籍自体も東西二字から、二つの石水院経蔵に編集、法華堂聖教も石水院経蔵や他の僧房に移された。特に天文年間

冊紙が集積されるようになった。「宮澤俊雅解題「高山寺経蔵とその目録について」（高山寺典籍文書文書綜合調査団「続高

山寺経蔵古目録」、東京大学出版会、一九九八年）

十四

金水敏「方便智院聖教目録解題」（高山寺典籍文書綜合調査団「明恵上人資料第四」、東京大学出版会、一九九八年）

（二三）